生命論

一、生命の本質論

色心不二

御義口伝の「帰命」について、「帰」とは、たえず新陳代謝して宇宙に還元されていく肉体であり、色法をいう。「命」とは心法のことである。絶えず、宇宙のリズムに、冥合してゆこうとする作用をいう。この色心不二の生命哲学が、最高の大哲理なりとの日蓮大聖人の御確信であられる。「色」とは、目にみえるもの、物質、形質、あるいは肉体を意味する。「心」とは物質にあらざるもの、性質、性分、あるいは精神、内在する力等を意味する。

唯物思想は、物質が根源であり、物質中心主義である。唯心思想は、精神が本源であり、物質は、その幻影にすぎないとする思想である。共に、ある一面の真理を説いたものとはいえよう。しかし、部分観は、部分観としての意義をもつだけである。部分観をもって、全体観とすることは、はなはだしい誤りといわざるを得ない。生命それ自体は、唯心でも、唯物でもない。思うに、現代の哲学においては、今日にいたるまで、生命について、幾多の議論が展開されてきた。だが、なんら根本的解決はなされていないのである。

十九世紀フランスの実験生理学者、クロード・ベルナールは次のようにいっている。

「唯心論と唯物論を哲学で論議するのはよかろう。が、実験生理学では問題にはならない。何の役にも立たない。軌範は実験にしか求められないからである。……今日では生理学は精密科学となった。もはや哲学や神学上の諸思想を払いのけるべきである。思えば長い間これらの思想が混在していた。数学者や物理学者に、唯物論者かときく必要がないように、生物学者にもそんな質問はすべきでないのである」

この主張は、いかに今日まで、唯物論ならびに唯心論が、生命自体の研究のさまたげになってきたかを物語る一つの証拠といえよう。彼自身が、究極を解決しえたとするのでなく、新しい角度からの究明が必要である。その一つの示唆として私は引例したわけである。

もはや、不可思議なる生命の実体を、唯物、唯心でみようとする時代は過ぎ去った。もしも、このような思想で論ずる人ありとせば、過去の死滅せる思想に執着する、あわれな人にほかならない。

それは結論していえば、生命は「色心不二」なのである。これこそ、現代の哲学、生物学、医学等々、すべてが帰趨していく事実なりと訴えるものである。特に、生命の問題と密接な関係をもつ医学の分野において、そうした傾向が顕著ではないかと思う。「精神身体医学」が最近とみに叫ばれるようになってきている。これも一つの好例と考えられる。これは、病気の原因を、たんに肉体だけに限るのではなく、心にも原因を求めようとする推移である。こうした考え方は、仏法では、すでに三千年前から説いてきた。

ある医学者は、次のように述べている。

「精神とか、心とは何か。ということは昔から問題になっていて、今日ではその本体はわからない。昔は肉体から独立した心があると考えられていたが、今日、医学者は心は脳の活動によって生ずると思っている。しかし、それは脳のどんな働きによるのかはわからない。2＋2＝4であると考える時や、私は悲しい、と感ずる精神的なものを、脳の細胞の何かの変化、電流や化学的変化で、おきかえていいあらわすことは出来ない。それで心は心、体は体として取り

扱っておくより仕方がないが、心と体にはわれわれに見える関係もないのかというと、そういうものでもない。

たとえば、酒を飲むと、アルコールが吸収されて脳へゆき、脳の神経細胞の代謝に、変化を与えるが、このときに心については、気が大きくなって愉快になったり、おしゃべりになったり、さらに多くのアルコールが行けば、意識を失ってしまうものだ。（体から心へ）

今度は、逆に心の変化が、体に変化をおよぼすことがあろう。実際こういうこともありうる。例えば、恐ろしい目にあったとする。恐ろしいというのは心の出来事であるが、物質的な体の方面では、顔の血管が収縮して蒼白になり、毛は逆立ち、体は震え、瞳孔は拡がり、心臓の鼓動は、激しくなり、血圧が上がる。一層恐ろしい目にあえば、下肢が麻痺して、いわゆる腰が抜けた状態となる。これらは、みんな、心の変化を原因とする体の変化である。（心から体へ）

これらの帰納的考え方は、仏法に説く、色心不二の生命哲学に一歩近ずいた証左といえよう。しかしながら、これは、医学上の立ち場の思索であり、肉体と心の表面的な関係を、ばく然といい表わしたにすぎない。極言すれば、現在の医学や生物学で、生命の実体を解明することは、到底不可能なことだ。これは、医学者や、生物学者自身が、すでに認めているところで

はないか。

ある生物学者は、次のように述べている。

「生命とは何か。このことは、物理学的な時間、空間が、物理的科学から定義できないと同様に、生命は生物学的科学からは、定義できないのであって、生命は把握する以外に方法はないのである。そして、この生命の把握という問題は、実は科学以外の体験の問題である」と。

ところで、いかに生命を把握するか、いかなる体験をせよというのかが、重大問題なのである。

なお、ある医学者は、医学の限界を次のように述べている。

「自然科学は人間が自然の中にある真理を研究して、それから得た結果を人間生活に利用しようとしている。それゆえ自然科学の根底には人間が自然を支配し利用しようとしている目的がよこたわっている。医学の行なうところはふつうこれである。しかし自然科学的な方法で医学はずいぶん発達したとはいえ、生命の神秘、こころの神秘についてはまだ何もわかってはいない。医学にたずさわるものは、この神秘に近ずこうとたえず努力をしなければならない。しかし病者はこの神秘が医者にわかっているはずだと考えて、自然科学に何とかしてもらうことができるはずであり、それが医学的治癒だと思っている。ところがほんとうはほとんど何もわかっていない。

解剖学は人のからだの部分にくわしい名をつけるのみであり、生理学は人のからだがはたらくときにどんな物質的変化があるかをみるだけのことである。内科では、ばい菌性の病気に対しては、それを滅すような物質を発見しつつあるとはいえ、その他の病気に対しては自然の治癒力をさまたげないようにみまもり、その間、病者の不安を医師の存在によってなぐさめているのである。あるいは完全になおらなかった病者に新しい世界をつくり出して病者をそこに適合させて治したように思っている。糖尿病患者は糖質摂取をへらしてインシュリン注射をするという世界改革を行なえば健康なごとくに生活してゆき、これが治療なのである。

外科では悪い所を切ってとってしまうのが治療である。胃癌ができれば胃を大部分とってしまい、虫垂炎の時には虫垂をとってしまう。しかし脳の病気の時に脳をとってしまうというわけにはいかない。とにかく医者は積極的に治療するということはなかなかできない。医者は、今のところ、毛一本生えさせることもできず、にきびのあとをきれいにすることもできないのである。

肉体的物質的病気でもそうであるから、脳のはたらきの異常とはいえ、こころの現象というような、いっそうつかまえどころのないものが関係した病気に対しては、自然科学的な物質的な手づるはほとんどないのである。神経症のごとき、脳の物質的なものを手がかりにできない

ような心の病気には、それを病気としてなおそうとしてあくせく思いわずらうのがいけない。病気なら病気で仕方がない。世間一般の価値判断からすれば悪いものではあるが、これはこれで仕方がないではないかと、自分のこころの状態をやむをえないものとして肯定し、自然にまかせるのである」

これらは、一往、医学を中心として論じたものである。医学は、直接生命の問題に関係あるがゆえに引いたにすぎない。この「色心不二」ということについては、御義口伝のいたる個所に出ている。

本有常住の生命観

本有常住の生命哲理は、寿量品の極意であり、それなくしては寿量品の価値はまったくない。のみならず一代聖教は泡沫に等しい。日蓮大聖人は、この本有常住の哲理を、さらに深く完璧に説かれ、自ら本有常住の振舞いを示され、一切衆生に、真実の幸福の道を開かれたのである。

本有とは、われらの生命は、誰から作られたものでもない。たとえば神によって作られたというものではない。また生を受けて、初めて、誕生したのでもない。もともと、この大宇宙と共に、厳然と有ったものだということである。常住とは、その生命は、大宇宙と共に、永遠に

続いているということであり、無始無終であり、しかも断続的ではなく、常にこの大宇宙にあるということである。

これは、難信難解中の難信難解の哲理である。われわれの生命を、たんに変化の面にのみ着目するならば、たしかに有為転変の無常の相であり、死ねば無であり、永久に、再び、この世に出現することはないと思うのも当然のことであろう。ゆえに、世の人々のほとんどは、現世主義的生命観に陥り、本有常住の生命観を信じようとしないのである。

だが、東洋の大乗仏法の真髄は、たんに変化の世界、仮有の世界だけではなく、その奥にある常住の世界を説き究めたのであった。

御書にいわく「近き現証を引いて遠き信をとるべし」（法蓮抄一〇四五ページ）と。

本有常住の生命哲理は、仏の内証の悟りであり、これをただちに理解し、信ずることはできないかもしれない。だが、この本有常住の生命観を骨髄とする大仏法を、実践することによって、現実に、偉大なる功徳の実証のあることをもって、その根幹たる本有常住の生命哲理を信ずべきである。

いま、再び御義口伝の本文の一節を引用しつつ、本有常住の生命哲理を論じていきたい。

「御義口伝に云く如来とは三界の衆生なり此の衆生を寿量品の眼開けてみれば十界本有と実の

如く知見せり」

「如来」とは、最も清浄な、力強い、何ものにも左右されない、金剛不壊の仏の生命である。それは、どこかの別世界にあるのではなく、われら衆生の生命それ自体である、と仰せである。われらの生命は、本来、仏界を内包せる尊極なる当体である。だが、生命の流転の上に染法が薫じ、無明の雲が、仏界をおおい隠し、三悪道、四悪趣に落ち込み、そこがさながら住所となってしまっているのである。

しかしながら「寿量品の眼開けてみれば」すなわち、内証の寿量品の眼が開かれ、大御本尊への唯一無二の信心に住したときに、わが生命は、本来、十界互具の当体であり、尊極無上の仏界の生命があったことを、この五体の上に覚知していくことができる。事実の上に、真実の幸福境に住し、内奥より清浄無染な、力強い生命の躍動があり、最高の価値創造の人生を歩んでいくことができる。

ここにお示しのごとく、わが生命が本有であると共に、十界も本有である。地獄界より仏界にいたるまで、誰人といえども、本来、これをそなえていることを知らねばならぬ。

これらの十界の生命活動は、常に縁にふれてあらわれてくる。もともとあるがゆえにあらわれてくるのであり、無から有を生ずるわけがない。

地獄界の人が、次の瞬間、天界の生命、活動、姿へと変わったとする。だが、それは厳密にいえば、変わったのではない。まったく同じ当体でありながら、縁にふれて天界があらわれたにすぎない。

現実の苦悩にさいなまれ、日々悶々として楽しまざる人に、この大生命力たる仏界が内包されているとは、思いも及ばぬことかもしれない。だが、事実は、一切衆生に、仏界の生命は、本有のものとして常住しているのである。これを事実の上に顕現していくには、わが当体を映し出して曇りなき明鏡たる事の一念三千の大御本尊による以外にないのである。

「三界之相とは生老病死なり本有の生死とみれば無有生死なり生死無ければ退出も無し唯生死無きに非ざるなり、生死を見て厭離するを迷と云い始覚と云うなりさて本有の生死と知見するを悟と云い本覚と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時本有の生死本有の退出と開覚するなり」

「三界の相」とは、生老病死である。すなわち、有為転変の無常の相である。生老病死のなかで最も重要な問題は、生と死である。したがって、生老病死も生死の二法に集約される。だが、この生死もまた、本有のものである、と仰せられているのである。

一往、生命それ自体を考えれば、生命は、生じたり滅したりすることはなく、永遠に常住す

るものである。

三世諸仏総勘文抄（五六三ページ）にいわく「生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顛倒なり本覚の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、劫火にも焼けず水災にも朽ちず剣刀にも切られず弓箭にも射られず芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つれども虚空も広からず心法も狭からず」と。

ここに心法とは、生命の本質であり、生命それ自体にほかならない。この生命そのものは、大宇宙と共に常住するものであり、生ずべき始めも、死すべき終わりもない。生死を離れた存在であり、したがって劫火にも焼けることなく、水災にも朽ちることなく、剣刀にも切られず弓箭にも射られるものではない。芥子粒のような極小のものの中に入れても、芥子粒が広がったり、心法が縮まったりするようなこともない。逆に虚空に遍満させても、虚空が広すぎるということもない。心法が狭すぎるということもないとの御文である。すなわち、広いとか狭いとか、大きいとか小さいとかいう相対的なものではないということで、生命の不可思議を仰せられたものである。

しかし、これは、生命の本質、生命そのものについていったものであり、生死にとらわれ、

本有常住の生命を知らない者に対する眼を開かしめるための御文である。再往、生も死も本有常住のものであり、生は、本有の生、死もまた本有の死である。

釈尊は、死を「方便現涅槃」と説き、生のための方便であるとしたのである。これまた真実であり、生き生きとした生命の躍動のために方便としていったん死ぬというのも偉大な卓見である。しかし、大聖人は、さらに深く、本有の生死と説き、生も死も、本来、本有のものであり、生命の本質にそなわる働きであると説かれたのである。生命は、生死を離れて、ほかにあるものではない。生命の常住と共に、生命の本質にそなわる働きとしてあらわれ、永遠に続きゆく当体なのである。日蓮大聖人が、忘持経事（九七七ページ）において、富木日常の母が亡くなったことに対し「生死の理を示さんが為に」と述べられたのは、この、本有の生死の深き哲理の上から仰せられたものと思う。

また、本有の生死を、信心に約していえば、永遠の生命を覚知した上での生死であり、大御本尊を信じた者の生死である。御義口伝上（七二四ページ）に「自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり云云」とあるのは、この本有の生死を仰せられたものである。法性の大地とは妙法の大地であり、幸福の大地である。生死の二法は、大白牛車の車輪のごとくである。永遠に幸福な世界において、生死の二法を繰り返していけるのである。

信心なき人々の生死は、六道輪廻の生死であり、迷いの生死であり、不幸の生死である。ゆえに、常に、不幸の巷を、生死生死と廻りゆく以外にない。

大御本尊を信じた者は、常に幸福の大地に住した一生を送り、それがまた永遠に続いていくことを、しみじみと実感し、確信しきっていけるのである。ゆえに、本文に「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時本有の生死本有の退出と開覚するなり」と仰せられたのである。

生死の二法は、たんに、いわゆる生と死だけを意味するのではない。瞬間瞬間の生命活動が、また、そのまま生死の二法なのである。先の地獄界と天界の例でいえば、地獄界の生命であった人が、次の瞬間、天界の生命へと転ずれば、地獄界の死であり、天界の生である。わが生命は、十界互具の当体であり、しかもその十界は、常に瞬間瞬間、縁にふれて生死の二法を繰り返しているのである。

しかして、この瞬間瞬間の生命活動に約して、本有の生死を論ずるならば、久遠元初の大法たる、大御本尊を信受した生活こそ、本有の生死であり、幸福の生死である。

生死一大事血脈抄（一三二六ページ）にいわく「妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを当体蓮華とも云うなり（中略）伝教大師云く『生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳』と文、天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云う

ことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華経の生死なり、天台の止観に云く『起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅』云云」と。

この文に、十界の生命ことごとく、生死の二法であることは明白である。しかもその生死の二法は一心の妙用なのである。また、生は起、死は滅であり、法性の起、法性の滅こそ、真実の起滅の姿なのである。

すなわち、大御本尊を信ずる、その信心の一心により、自在に生死の活動をしていくことができる。一切の活動を、幸福の方向へ、繁栄の方向へと向かわしめることができる。すなわち、真実の幸福の起滅を行なっていくことができることを断言されているのである。

信心なくば、真実の幸福の生死、起滅はない。常に、三悪道、四悪趣の生死・起滅の流転の中に没入し、その濁流に流されていくのみである。信心強盛に、時宜相応の仏道修行に励む人こそ、仏界に照らされ、この人生を、自在に乱舞し、永遠の幸福を開いていく人であることを強く信ずべきである。

永遠の生命

生命の永遠ということに関して、われわれの生活をとおして、思索してみよう。現代の多く

の人々は、生命に対してはなはだ無知である。しかし、幸福ということにせよ、人生ということにせよ、日常の生活にせよ、ことごとく自分の生命と切っても切り離せないことはわかる。それほど自分にもっとも大事な問題が、もっともおろそかにされているということは、まったく迂闊な話といえよう。また一方では、偏頗な生命観に固執する人もいる。迷信を少し装飾したていどの霊魂説や、また、それと相対する唯物思想が、大きく世を害していることに注目すべきである。とくに、最近では、世の知識階級といわれる人の中に、唯物論的な考え方のもとに、死後の生命は迷信であるとして信じない人もいる。

そこで、科学においては、生命についてどう考えているか、またその限界と仏法との関係を、とくにオパーリンの「生命の起原」を見ることによって明らかにし、さらに現代の現世主義的生命観に批判を加え、最後に生命の永遠であることを論じていこう。

生命の起原ということは、西洋においても、昔から今日に至るまで、人々の深い関心事であった。キリスト教においては、生命の発生は創造によるとされ、その他、自然発生説、あるいは生命の連続説等があり、これらの説は、多くの学者によって否定されまたは修正されてきた。そして、近頃の有力な説として挙げられるのは、オパーリンの学説である。彼はソビエトの生化学者であって、地球の進化過程と生命発生の関係を、極めて多量な資料によって体系づ

け、一九三六年に「生命の起原」と題して発表した。彼は炭素化合物が発展していって第一に有機化合物が生成され、第二に蛋白質が生成され、第三の段階として物質代謝の発生があったと説き、そして第三段階において生命が発生したといえると述べている。これは要するに、生命は地球外から飛んできたものではなく、地球自体が進化し、その進化過程において地球自体から生命が発生したと説くのである。

さて、生命に対する考え方には、二つの大きな流れがある。一つは観念論であり、一つは唯物論である。そしてオパーリンも「この生命の本質に関する問題は、最古の時代から現代に至るまで、つねに二つの和解し難い哲学の陣営——観念論と唯物論——の間で行なわれてきた激烈な思想闘争の基本的なよりどころの一つであったし、また現在でもそうである」と述べているごとく、生命観の対立が、思想の対立の根本原因なのである。

観念論で説くところの生命観は、大体次のようである。生命の本質は、物質を超越した霊魂あるいは生気であって、物質は、霊魂または生気が生物をつくり、生物に形態や構造の合目的性をあたえ、呼吸と運動の能力を所有せしめ、一般にこれらを生き物にするところの材料にすぎない。そして霊魂が飛び去ると死が訪れ、生命のないぬけ殻——死体が残るのみであると。

オパーリンは、この観念論の基盤をなす生命論を否定し、唯物論の見地に立脚する。彼は、

次のように述べている。「唯物論はこれと正反対の観点から、生命の本質の問題に接近する。唯物論は自然科学が得た事実にもとづいて、生命はほかの全世界と同様に、その本質は物質的であり、生命を理解するためには、実験的にとらえられない魂の始原などというものを認識する必要のないことを確信する。それのみか、唯物論の立ち場からは、外界を客観的に研究することこそ、生命の本質の理解に到達するだけでなく、生物的自然を人類の福祉のために変化させ改造しうる確実な方法なのである」と。

彼はさらに、生命を全物質と同一視する機械的唯物論を否定し、弁証法的唯物論を強調するのである。「……このように、生命はその性質上物質的である。しかし生命は全物質に不可分な共通の性質ではない。生命は生物にしかない。生命は、生物界とは質的に異なる物質の特殊な運動形態であり、生物のみに内在する特異な生命学的性質および法則であって、これは無機的自然を支配する法則だけに解消しうるものではない」と。彼は、ここでも述べているごとく、生命を単に静的なもの、すなわち物質それ自体としてとらえているのではなく、生命は「物質の特殊な運動形態であり、生物のみに内在する生物学的特質および法則性である」と生命を動的にとらえているのである。

彼の生命に対する考察は、こうした弁証法的唯物論の見地に立ったものであり、その前提に

もとづき「生命の起原」も展開されているのである。この弁証法的唯物論については後にふれるところであるが、二十世紀の偉大なる科学者が、多くの実験と資料とによって、発表した「生命の起原」それ自体については、高く評価してよいと思う。また、彼よりも少しおくれて、イギリスの物理学者・バナールも「生命の起原」に関して根本的に同じ結論に到達していることを考えるときに、真実を多く含んでいることを知らされるのである。

この説が、また仏法の説くところに一歩近づいていることも知るべきである。仏法においては、宇宙の森羅万象はことごとく、妙法蓮華経の当体であると説かれている。この妙法蓮華経は生命の本質であり、したがって宇宙の森羅万象は、ことごとく、その本質を論ずれば生命なのである。すなわち、地球自身も一個の生命体なのである。地球自身から生命体が発生したとすれば、地球が、それ自体に生命を発現させる力を内在している一個の偉大なる生命体であるということが納得されやすくなる。事実、今日の科学者の中で、広い意味では一切が生命体であることを否定する人はほとんどいなくなっているのである。

ここで、われわれが考えなければならないことは、オパーリン等の説く生命観は、生物学的見地よりする生命観であるということである。すなわち「生命は生物にしか存在しない」との前提に立っているのである。この生物学の目指すところは、「生物一般にそなわっている生命

とは何か」と問い、その本質を理解して、人間の欲するように生物を変化させ医学や農業に役立てようというものである。なるほど、こうした研究を推し進めてゆくには、どうしても唯物的見地に立たざるをえない。しかし、これは医学や農業に大いに役立ったとしても、「人生をいかに生きるべきか」「いかにしたら幸福が得られるか」といった人生の根本問題は、解決できないのである。むしろ、このような唯物的生命観をもって、人生の根本問題を解決しようとしたならば、生命の尊厳を見失ってしまう。

またオパーリン等の科学者が問題にするのは、あくまで生命が発現し発展するという前提に立った変化現象であり、部分観である。もともと彼が前提としている弁証法的唯物論それ自体が、物事を動的にとらえ、変化現象に着目している以上、それを前提として出発している彼の「生命の起原」が、そうした部分観になるのは当然といえよう。仏法では、このような変化の世界を「仮有の世界」と呼んでいるが、まさに彼らが問題にしているところは、有為転変する「仮有の世界」であり「流転の世界」である。これに対し、仏法では、変化する面を認めつつも、常住の面を根底に置いているのである。

したがって、オパーリンが「もともと生命はなかったが、物質の変化によって生命が発生した」というごとく、科学者達の考え方の基礎は「もともとそうでなかったものが、変化してそ

うなった」といったものであり、彼らには「もともとあったものが、縁にふれて発現してくる」といった考え方は、甚しく欠如しているようである。むろん、科学は、現象形態より実体を探ろうというものであるがゆえに、そのように考えることは当然であろうが、しかし、それでは、物事の経過、すなわち物事の「いかに」を説明し得ても、根本原因は、究明され得ず、単に不問にふすに止まるであろう。

アメリカの社会学者・マッギーヴァーはいう。「科学は、わたしたちの最終的な疑問については、なに一つ答えていない。科学は物事のいかにを示そうとしているのであって、何故に、をではない。それは生命の進化の力学を跡づけているのであって、何故に進化してきたかを説明してはいない」（「幸福の追求」）と。よって、科学は、根本的な問題になると、多く偶然に支配されている。

しかし、宇宙の調和した姿、偉大なる力、生命の神秘、これらについて多くの観念論者は、「何故に」を「神によって」と因果づけることによって解消しようとする。こんな子供だましみたいなもので、理性ある人が、ごまかされるわけがない。ところが現実に、根本問題を考えていくと、わけがわからなくなり、神を認めることによって妥協する人が、相当の知識人の中にもよく見られるのである。

まことに、人生、宇宙の根本問題たる「生命」を究明したものこそ仏法である。仏法こそ全体観に立ったものである。世の多くの人は、部分観をもって全体観と混同しがちである。なぜなのか。それは仏法を知らないからである。全体を知ってはじめて、部分観を部分観としてとらえることができるのである。すなわち、仏法を知ってはじめて科学の位置も明瞭となるのである。

また科学に哲学が必要であるとは、現代の科学者の多くが認めるところである。科学の世界では、実験を重んずる。しかし無秩序に盲目的に実験するのではなく、一定の秩序と方向によって実験は行なわれるのである。オパーリンの「生命の起原」に対する考察も、実験も、弁証法的唯物論という哲学が根底にあることは前に述べたとおりである。

それゆえ、科学の根底に、いかなる哲学があるかということが、重要な問題となるのである。科学の成果を善用するのみならず、科学に偉大なる力を与え、方向を与える、最高の哲学が、現代の行き詰まった科学界に必要であることを痛感するものである。

生物学では、生命を無生物の対立物としてとらえる。したがって、生と死という問題を解決することができないでいる。生と死——これこそ人生の重大問題ではないか。これについて深刻に悩んだ人は、昔の人も、現代の人も、それこそ多くの数にのぼるであろう。仏法では、こ

の生と死の問題を徹底的に解決しているのである。

さて、多くの人は、生命はこの世だけのものである、すなわち、生まれてきた時に初めて生じ、死ねば泡のごとく消え去ると考える。しかし、それは実に浅はかな考え方である。こうした考え方をする人は、科学万能主義で宗教を否定する者に多い。ところで科学は、原因、結果の法則で成り立っているのである。ところが、もし、生まれて来た時に生命が発生したというなら、生命に差別ができる原因が究明され得ていない。単に動物と植物の相違、人間と馬の相違、同じ人間でも、男と女、または貧乏な家に生まれる人と、富裕な家庭に生まれる人との相違も、結果だけであって、どうしてそのような差別ができるのかという本因が究明されなくなってしまうのである。

人は不幸につぐ不幸の生活をしている他人に対して「あの人は運が悪いのだ」等と割り切っていう。しかし当事者にとっては「どうして自分はこんなに不運なのだろう」と、第三者がばくぜんと原因としてあげているものを、一歩つっこんで考え、なんとか立ち上がろうと努力するのである。

それは自分にとって関係の深い問題であればあるほど、その人は、原因をより根本的に探ろうとするからである。しかして、その根本原因は、もし過去を認めない限り、解決されないで

あろう。科学者は、自然界にのみ原因、結果の法則を考えようとするが、人生にも厳然として原因結果の法則が存するのである。ただ自然界は相対的に画一的であるが、人生は複雑である。そこで、自然界の因果はわかりやすいのであるが、人生における因果律には、なかなか気がつかないのである。

しかし自然界にのみ因果律を認めて、人生における因果律を否定することは、かえって非科学的であり、自らの愚を表示しているものといえよう。思うに科学の歩んできた道は偶然と思われてきたことを、必然であると示す闘いの道ではなかったのか。

また、生命は死んだならばもう消えてなくなるとは、なんと浅はかな考え方であろうか。アイヒマンは、六百万人のユダヤ人を殺した張本人の一人として、死刑に処せられた。一人殺しても死刑になる人もいる。何百万人殺害しても、一人殺しても、死という同じ結果に終わるならば、不合理この上ないではないか。しかもアイヒマンが死刑に処せられたのは、ドイツが敗戦国だったからである。もし、戦勝国だったらどういうことになったであろうか。あるいは、英雄として生涯を送るようになったかも知れない。「一人殺せば罪人、百万人殺せば英雄」とは現代にも存する疑惑である。

例えば、広島、長崎に投下され、一瞬にして四〇万余の日本国民の生命を奪った原子爆弾の

問題はどうであろう。理由はどうであれ、人道上の問題として許され得るものではない。瞬間の閃光によって、それまで人として平和な生活を送っていた民衆が、火の海と化した巷を、全身焼けただれてのたうちまわり、恨みをのんで死んでいった。地獄絵図のようなこの事実、さらには、からくもこの大惨劇から逃がれた多くの民衆が、原爆症という病魔に冒されて、いつ死ぬかもしれない不安と恐怖に襲われながら、現在も無限の苦しみと闘っている現実、これほどの恐ろしいことはあるまい。またこれほどの大犯罪はあるまい。しかし、いったい、この原爆投下の責任者が、どういう刑罰を受けたというのだろうか。どういう罪の償いをしたというのであろうか。

このように、人類に大きな惨事をまき起こす人がいる一方、自らは不遇の身でありながら、人のため、世のため、国のために尽くすまじめな人もいる。死ねば、同一結果に終わる。すなわち、同じく消滅してしまうとは、まことにもって不合理といわなければならぬ。

また、ある人が苦学して血のにじむような努力をして大学までいったとする。ところがいよいよ大学を卒業することになって病のために倒れたならば、その人のそれまでの努力は、いったい何のためだったというのであろうか。そして、もし死後の生命が否定されるならば、われわれはまじめに生きることが馬鹿馬鹿しくなる。法律の網の目をくぐって生きた方が得であ

る。一瞬のごとくにして一生は経過する。この短い一生を、できる限り楽しく、人のことなんかどうでもよい、自分だけが楽しみぬけばそれでよいといった考え方が横行するに違いない。

西洋では、よく「良心」なる言葉を使う。この言葉は観念的なものであるが、しかし、何かを意味しているといえなかろうか。

また、よく唯物論的な考え方をする人の中で「死とは、高次神経系の機能の停止」などと、とくとくとして答える人も、一たび自分の最も近しい人が死んだとき、果たして、こんな風に考えるであろうか。また自分が死に直面したらどうであろう。深刻な心となるに違いない。

また、昔より今日に至るまで、しかもこのように科学の発達した時代でさえ、宗教はなくならないという事実、そしてまた、相当の科学者が、宗教を信じているという事実、たとえ信じないまでも、宗教が必要であることを強調する偉大なる科学者がいるという事実、これは一体何を意味しているのであろうか。

以上の点を考えても、われわれは、生命は必ず、過去世にも存し、また未来にも続いていくこと、そして、すべての人が無意識のうちにも、三世の生命を感じており、また、三世の生命、永遠の生命を説く真実の仏法を求めていると確信してやまない。

〔注〕「1　生命の本質論」は池田会長の「御義口伝講義上下」から生命論の部分を抜粋したものです。

二、戸田前会長の生命論

生命の不可思議

わが国の神道が超国家主義(注1)、全体主義(注2)に利用されて、ついには無謀なる太平洋戦争にまで発展していったときに、私は恩師故牧口常三郎先生および親愛なる同志とともに、当時の宗教政策のはなはだ非なることを力説した。すなわち、日本国民に神社の礼拝を強制することの非論理的、非道徳的ゆえんを説いたのであるが、そのために昭和十八年の夏弾圧されて、爾来二か年の拘置所生活を送ったのであった。

注1　超国家主義

個人主義や自由主義を否定する極端な国家主義、全体主義である。国家を超越した国際主義、世界主義という意味に用いられる場合もあるが、ここでは前者を指す。

注2　全体主義

個人の自由、平等とか、多数決の原理のようなデモクラシーの諸原理を排除して、全体の優先、指導者主義、権力主義をとる。集会や結社の自由を制限したり、禁止したりして、あらゆる団体を国家権力のもとに統制する主義。

冷たい拘置所に、罪なくとらわれて、わびしいその日を送っているうちに、思索は思索を呼んで、ついには、人生の根本問題であり、しかも難解きわまる問題たる「生命の本質」に突き当たったのである。「生命とは何か」「この世だけの存在であるのか」「それとも永久につづくのか」これこそ永遠のナゾであり、しかも、古来の聖人、賢人と称せられる人々は、各人各様に、この問題の解決を説いてきた。

不潔な拘置所にはシラミが好んで繁殖する。春の陽光を浴びて、シラミはのこのこと遊びにはいだしてきた。私は二匹のシラミを板の上に並べたら、彼らは一心に手足をもがいている。まず一匹をつぶしたが、他の一匹はそんなことにとんちゃくなく動いている。つぶされたシラミの生命は、いったいどこへ行ったのか。永久にこの世から消えうせたのであろうか。また、桜の木がある。あの枝を折って花びんにさしておいたら、やがてつぼみは花となり、弱々しい若葉も開いてくる。この桜の枝の生命と、もとの桜の木の生命とは別のものであるか、同じものであるのだろうか。生命とはますます不可解なものである。

その昔、生まれてまもないひとりの娘が死んで、悩み、苦しみぬいたことを思い出してみる。そのとき、自分は娘に死なれてこんなに悩む。もし妻が死んだら（その妻も死んで自分を悲しませたが）……もし親が死んだら（その親も死んで私はひじょうに泣いたのであったが）……と思

ったときに身ぶるいして、さらに自分自身が死に直面したらどうか……と考えたら、目がくらくらするのであった。それ以来、キリスト教の信仰にはいったり、また阿弥陀経によったりして、たえず道を求めてきたが、どうしても生命の問題に関して、心の奥底から納得するものはなにひとつ得られなかった。

その悩みを、また、独房の中で繰り返したのである。元来が科学、数学の研究に興味をもっていた私としては、理論的に納得できないことは、とうてい信ずることはできなかった。そこで私は、ひたすらに、法華経と日蓮大聖人の御書を拝読した。そして、法華経の不思議な句に出会い、これを身をもって読みきりたいと念願して、大聖人の教えのままにお題目を唱え抜いていた。唱題の数が三百万遍になんなんとするときに、私はひじょうに不思議なことに突き当たり、いまだかつて、測り知りえなかった境地が眼前に展開した。喜びに打ち震えつつ、ひとり独房の中に立って、三世十方の仏・菩薩いっさいの衆生に向かって、かく叫んだのである。

「遅るること五年にして惑わず、さきだつこと五年にして天命を知りたり(注3)」と。

かかる体験から、私はいま、法華経の生命観に立って、生命の本質について述べたいと思うのである。

注3　遅るること五年……さきだつこと五年

孔子は論語で「四十にして惑わず」「五十にして天命を知る」といっている。戸田前会長は拘置所の中で、生命の不思議を感得し、広宣流布のために命を捨てて戦うことを誓われた。すなわち、もう何ものにも迷わず、しかも天命を知ることができたといえるであろう。しかも、その時が四十五歳であったので、孔子に比べた場合、遅れること五年であり、さきだつこと五年になるわけである。

三世の生命

法華経譬喩品にいわく(注4)

「爾の時に仏、舎利弗に告げたまわく、吾れ今、天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於いて説く。我昔曾て二万億の仏の所に於いて、無上道の為の故に、常に汝を教化す。汝亦、長夜に我に随って受学しき。我方便を以って汝を引導せしが故に、我が法の中に生ぜり。舎利弗、我昔、汝をして、仏道を志願せしめき。汝今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂えり。我今還って、汝をして、本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の声聞の為に、是の大乗経の妙法蓮華、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説く。舎利弗、汝未来世に於いて、無量無辺不可思議劫を過ぎて、若干千万億の仏を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して、当に作仏することを得べし」

注4　法華経譬喩品にいわく、

譬喩品第三で、仏の述成と授記を明かす文である。舎利弗等の声聞の弟子たちは、釈尊が過去世において二万億の仏のもとで説法していたときに、釈尊に従って仏道修行を励んだのである。そうした過去世の因縁によって、釈尊がインドに出現したときには、また「わが法の中」すなわち釈尊の弟子として生まれることができたのである。しかして未来には、無量無辺不可思議劫という長い時代を経て、成仏するであろうと授記をしている。以上、生命が過去、現在、未来の三世にわたることの証明に引かれた経文である。

化城喩品にいわく(注5)

「是の十六の菩薩沙弥は、甚だ為れ希有なり。諸根通利して智慧明了なり。已に曾て、無量千万億数の諸仏を供養し、諸仏の所に於いて、常に梵行を修し、仏智を受持し、衆生に開示して、其の中に入らしむ。汝等皆、当に数数親近して、之を供養すべし。所以は何ん。若し声聞、辟支仏、及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の、所説の経法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆、当に阿耨多羅三藐三菩提の如来の慧を得べし。仏、諸の比丘に告げたまわく、是の十六の菩薩は、常に楽って、是の妙法蓮華経を説く。一一の菩薩の所化の、六百万億那由佗恒河沙等の衆生は、世世に生まるる所、菩薩と倶にして云云」

注5　化城喩品にいわく、

化城喩品第七に、三千塵点劫前の大通智勝仏の因縁を説かれている文である。十六の菩薩沙弥と

は、十六王子である。この十六王子は、出家して仏道に励み、すでにかつて無量千万億数の諸仏を供養してきたのである。しかして、この王子たちの弟子は、六百万億那由佗恒河沙というたくさんの弟子たちであるが、未来世においては世々に菩薩とともに生まれてきて、仏道修行に励んでいくのである。

如来寿量品にいわく(注6)

「諸の善男子、如来諸の衆生の、小法を楽える徳薄垢重の者を見ては、是の人の為に、我少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我、実に成仏してより已来、久遠なること斯の若し」

自我偈にいわく(注6)

「我仏を得てより来、経たる所の諸の劫数、無量百千万億載阿僧祇なり」

注6　如来寿量品にいわく、自我偈にいわく、

寿量品第十六には永遠の生命を説く。「久遠なること斯の如し」とか「無量百千万億載阿僧祇なり」とは、永遠の生命を説く文である。

右の経文は法華経のごく一部ではあるが、およそ釈尊一代の仏教は、生命の前世、現世および来世のいわゆる三世の生命を大前提として説かれているのである。ゆえに仏教から三世の生命観を抜き去り、生命は現世だけであるとしたならば、仏教哲学は、まったくその根拠を失っ

てしまうと考えられるのである。しかして、各経典には生命の遠近・広狭によって、その教典の高下・浅深がうかがわれるのである。さらに日蓮大聖人にあっても、三世の生命観の上に立っていることはいうまでもない。ただ釈尊よりも大聖人は生命の存在を、より深く、より本源的に考えられているのである。

開目抄上（御書一八六ページ）にいわく(注7)

「儒家には三皇・五帝・三王・此等を天尊と号す（乃至）貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然等云云。

かくのごとく巧に立つといえども・いまだ過去・未来を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄という但現在計りしれるにたり」

また同下（御書二三二ページ）にいわく(注7)

「詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん、身子が六十劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへ、久遠大通の者の三五の塵をふる悪知識に値うゆへなり、善に付け悪につけ法華経をすつるは地獄の業なるべし」

注7　開目抄上にいわく、また同下にいわく、

初めの儒教についての文は、儒教には生命の過去も未来も説いていない。ただ、現在の道徳ばかり

を説いているとの意である。次の「詮ずるところは……」の文は、永遠の生命観の上に立っての教えである。「身子が六十劫の菩薩の行」とは、身子とは舎利弗であり、舎利弗が六十劫の菩薩の行を立てて修行を始めたが途中で退転したことをお述べになっている。「三五の塵をふる」とは、久遠下種の者が退転して五百塵点劫を経歴し、大通下種の者は退転して三千塵点劫を経歴したのである。

撰時抄（御書二六九ページ）にいわく、

「今の人人いかに経のままに後世をねがうともあやまれる経経のままにねがはば得道もあるべからず、しかればとて仏の御とがにはあらじとかかれて候」（過誤・書）

かかる類文はあまりにも繁多であり、三世の生命観なしには仏法はとうてい考えられないのである。これこそ生命の実相であり、聖者の悟りの第一歩である。しかしながら、多くの知識人はこれを迷信であるといい、笑って否定するであろう。しかるに、吾人の立ち場からみれば、否定する者こそ、自己の生命を、科学的に考えないうかつさを笑いたいのである。

およそ科学は、因果を無視して成り立つであろうか。宇宙のあらゆる現象は、かならず原因と結果が存在する。

生命の発生を卵子と精子の結合によって生ずるというのは、たんなる事実の説明であって、より本源的に考えたものではない。あらゆる現象に因果があって、生命のみは偶発的にこの世に発生し、死ねば泡沫のごとく消えてなくなると考えて平然としていることは、あまりにも自

己の生命に対してむとんちゃくな者といわねばならない。

いかに自然科学が発達し、また平等を叫び、階級打破を叫んでも、現実の生命現象はとうていこれによって説明され、理解されうるものではない。われわれの眼前には人間あり、ネコあり、犬あり、虎あり、杉の大木があるが、これらの生命は同じか、違うか。また、その間の関連いかん。同じ人間にも、生まれつきのバカと利口、美人と不美人、病身と健康体等の差があり、いくら努力しても貧乏である者もおれば、また、貪欲や嫉妬に悩む者、悩まされる者などを、科学や社会制度では、どうすることもできないであろう。かかる現実の差別には、かならず、その原因があるはずであり、その原因の根本的な探究なしに、解決されるわけがないのである。

ここにおいて、三世の生命を説くからといって、われわれは霊魂の存在を説いているのではない。人間は肉体と精神のほかに、霊とか魂とかいうものがあって現世を支配し、さらに不滅につづくということを、承認しているのではないことを明らかにしておく。

永遠の生命

人間の生命は三世にわたるというが、その長さはいかん。これこそ、また、仏法の根幹であ

るゆえに、いま左の経文を引用する。

妙法蓮華経如来寿量品にいわく(注8)

「然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり。譬えば、五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有って、抹して微塵と為して、東方五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を尽さんが如き、諸の善男子、意に於て云何。是の諸の世界は、思惟し校計して、其の数を知ることを得べしや不や。弥勒菩薩等、倶に仏に白して言さく、世尊、是の諸の世界は、無量無辺にして、算数の知る所に非ず。亦心力の及ぶ所に非ず。一切の声聞・辟支仏、無漏智を以っても、思惟して其の限数を知ること能わじ。我等阿惟越致地に住すれども、是の事の中に於いては、亦達せざる所なり。世尊、是の如き諸の世界無量無辺なり。爾の時に仏、大菩薩衆に告げたまわく、諸の善男子、今当に分明に、汝等に宣語すべし。是の諸の世界の、若しは微塵を著き、及び著かざる者を尽く以って塵と為して、一塵を一劫とせん。我成仏してより已来、復此に過ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫なり。是れより来、我常に此の娑婆世界に在って説法教化す」

注8　妙法蓮華経如来寿量品にいわく、

寿量品で五百塵点劫の顕本を説き、永遠の生命を説く文である。

右の経文は釈尊の数多の経文中、もっとも大切な部分であり、悟りの極底である。その大意をいうならば「おまえたちは皆私がこの世で仏になったと思っているが、じつは自分が仏になったのは、いまから五百塵点劫という数えることもできないほど昔に成仏して以来、つねにこの娑婆世界にいて活動をしているのである」という意味であり、自分の生命は現世だけのものではなく、また、悟りも現世だけのものでなくて、永久の昔からの存在であると喝破しているのである。

さらに同じく寿量品の次の文は前文とは別の立ち場から拝すべきである。

「諸の善男子、如来諸の衆生の、小法を楽える徳薄垢重の者を見ては、是の人の為に、我少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我、実に成仏してより已来、久遠なること斯の若し」

すなわち、右の文は福徳の薄い心の濁った者は、生命は現世だけであると考えているが、真実の生命の実相は無始無終であると説かれているのである。

日蓮大聖人におかれては、釈尊が仏の境涯から久遠の生命を観ぜられたのに対して、大聖人は名字即の凡夫位において、本有の生命、常住の仏を説きいだされている。すなわち凡夫のわれわれの姿自体が無始本有の姿である。瞬間は永遠をはらみ、永遠は瞬間の連続である。久遠

とは、はだらかさず、つくろわず、もとのままと説かれているのである。

三世諸仏総勘文教相廃立（御書五六八ページ）にいわく（注9）

「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為に世世・番番に出世・成道し在在・処処に八相作仏云云」

注9　三世諸仏総勘文抄にいわく、

五百塵点劫の当初とは、久遠元初である。「釈迦如来が凡夫でおわせし時」とは、名字即の釈尊であって、すなわち日蓮大聖人のことである。釈尊の仏法では、久遠元初とか、名字即の仏というようなことは説いていない。この文により、本因の境智行位が明らかである。我身は地水火風空（境）知る（智）（行）凡夫にて（位）

当体義抄（御書五一三ページ）にいわく（注10）

「聖人理を観じて万物に名を付くる時・因果倶時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・倶時に感得し給うが故に妙覚果満の如来と成り給いしなり」

注10　当体義抄にいわく、

日蓮大聖人の仏法を、名体宗用教の五重玄で明らかにされている。之を名けて妙法蓮華と為す（名）

十界三千の諸法を具足して闕減無し（体）、仏因・仏果・同時に之を得（宗）、師と為して修行覚道し（用）

十法界事（御書四二一ページ）にいわく、

「迹門には但是れ始覚の十界互具を説きて未だ必ず本覚本有の十界互具を明さず（乃至）故に無始無終の義欠けて具足せず云云」

御義口伝下（御書七五二ページ）にいわく（注11）

「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり、寿量品の事の三大事とは是なり、六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり頭に南無妙法蓮華経を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて聞く所の題目なるが故なり聞き奉りて修行するは観行即なり此の観行即とは事の一念三千の本尊を観ずるなり、さて惑障を伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即と云うなり無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり、惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体本有の儘を此の品の極理と心得可きなり」

注11　御義口伝下にいわく、

「無作の三身とは末法の法華経の行者なり」とは、日蓮大聖人であらせられる。すなわち、日蓮大聖人の宝号を南無妙法蓮華経というのである。人法一箇の文である。

さて、すでに明らかなごとく、仏を中心として展開する釈尊の一念三千は、本迹ともに理のうえの法相であり、凡夫の当体本有のままにおいて身につける大聖人の直達正観・事行の一念三千こそ、もっとも生命の実体を、より本源的に説き明かされているものと拝する。

私に会通を加えて本文をけがすことを恐るといえども、久遠の生命に関してその一端を左に述べていく。

生命とは宇宙とともに存在し、宇宙より先でもなければ、あとから偶発的に、あるいは、なにびとかによってつくられて生じたものでもない。宇宙自体がすでに生命そのものであり、地球だけの専有物とみることも誤りである。われわれは広大無辺の大聖人のご慈悲に浴し、直達正観・事行の一念三千の大御本尊に帰依したてまつって「妙」なる生命の実体把握を励んでいるのにほかならない。

あるいはアミーバから細胞分裂し進化したのが生物であり、人間であると主張し、私の説く永遠の生命を否定するものがあるであろう。しからば、赤熱の地球が冷えたときに、なぜアミーバが発生したか、どこから飛んできたのかと反問したい。

地球にせよ、星にせよ、アミーバの発生する条件が備われば、アミーバが発生し、隠花植物の繁茂する地味、気候のときにはそれが繁茂する。しかして、進化論的に発展することを否定

するものではないが、宇宙自体が生命体であればこそ、いたるところに条件がそなわれば、生命の原体が発生するのである。

ゆえに幾十億万年の昔に、どこかの星に人類が生息し、いまは地球に生き栄えているとするもなんの不思議はないのである。また、いずれかの星に、まさに人間にならんとする動物がいることも考えられ、天文学者の説によれば、金星が隠花植物の時代であるとの説を聞いたことがあるが、私は天文学者ではないから、これを実証することはできないにしても、さもありなんと信ずるものである。

あるいは、たんぱく質そのほかの物質が、ある時期に生命となって発生したと説く生命観にも同ずるわけにはいかない。たんぱく質等は、生命発生の機縁（きえん）にはなるであろうが、生命自体は宇宙とともに本有常住の存在であるからである。

生命の連続

生命は永久であり、永遠の生命であるとは人々のよくいうところであるが、この考え方にはいろいろの種類がある。

ある人は観念的にただ「永遠」であると主張してボンヤリ信じているが、こんな観念論的な

永遠は吾人のとらないところである。

また、子孫に生命が伝わって、その子孫に伝わる生命のなかに自分が生きていると考える者もあるが、これでは永遠とはいえまい。もし、子孫が断滅したならば自分がなくなるではないか。地球が滅びたらなくなるような生命では永久とはいえない。また、子孫と自分との関係において、現に、いま生きているむすこのなかに、同じく活動している自分の生命があることになり、はなはだ不合理である。このような人は、自分の死後の生命をどう考えているか。子孫のからだを自分の墓場のように考える浅薄な生命観であり、永久の生命を知っているとはいえないのである。

かの有名な高山樗牛先生が「人が偉大な仕事をする。その偉大な仕事は後世にも残る。その後世に残した偉大な仕事に自分が生きている」といわれたことを記憶している。樗牛先生は、偉大な文学者であるだけに、私はひじょうに悩んだものである。もし、先生のことばのごとくならば、平凡なわれわれや、犬やネコは永久な生命といえないことになる。よってこの場合の永遠の生命に普遍妥当性がないわけである。長いあいだ、ほんとうかウソかと悩みつづけた結果、彼は偉大なる文学者ではあるが、死後の生命に関してははなはだ浅薄な考え方であるという結論に達した。

また、少しく理論的であるけれども、事実とは相違している生命論に、生物にはなにか霊魂というようなものがあり、それが永久に伝わっていくのだと考えているのがある。これは、ちょっと聞くと真実のように思われるので、そうとうの学者や、多数の人々によって主張されている。しかしながら、これも仏教哲学の対象としてはぜんぜん無価値なものである。釈迦は涅槃経のなかにおいて、徹底的にこれを否定している。すなわち、この考え方は邪見であって、正しいものではないとしているのである。しからば、どんなふうにしてあらゆるものの生命が連続するのであろうか。

死後の問題はなかなか仏教哲学でも最高に属するもので、その素養のない人に対しては、誤りを起こすおそれがあるゆえに、これをはぶくことにし、きわめて常識論的に取り扱うから、その点は了承されたい。

寿量品の自我偈には「方便現涅槃」とあり、死はひとつの方便であると説かれている。たとえてみれば、眠るということは、起きて活動するという人間本来の目的からみれば、たんなる方便である。人間が活動するという面からみるならば、眠る必要はないのであるが、眠らないと疲労は取れないし、また、はつらつたる働きもできないのである。そのように、人も、老人になったり、病気になって、局部が破壊したりした場合において、どうしても死という方便に

よって若さを取り返す以外にない。

仏法の極理は一念三千であるが、死後の生命もまた、一念三千との関連において解決されていることはいうまでもない。さて、開目抄上（御書一八九ページ）に「一念三千は十界互具よりこと起はじまれり」とおおせられ、観心本尊抄（御書二四一ページ）では十界について次のように述べられている。

「数ば他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪り現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋は地獄、貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり（乃至）世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し云云」

われわれの日常生活における心の状態をよくよく思索するならば、瞬間瞬間に、一念一念と起きては消え、起きては消えているのが、貪りとか、喜びとか、怒りである。そして二つの念がいちじに起こることは、けっしてありえないのである。ここで少し説明を加えたいのは、前掲の本尊抄に「仏界計り現じ難し」とあるが、その仏界を現ずる縁となるものは何か。日蓮大聖人の仏法の極理は事行の一念三千であり、実践の形態は三大秘法にある。ゆえに本門戒壇の御本尊を信仰することのみが、その縁となって即身成仏をえられるのである。ただし、この点

に関しては、別の機会に詳しく述べたいと思う。

われわれの心の動きをみるに、喜んだとしても、その喜びは時間が経つと消えてなくなる。その喜びは霊魂のようなものがどこかへ行ってしまったわけではないが、心のどこかへ溶け込んでどこを捜してもないのである。しかるに、何時間か、何日間かの後、また同じ喜びが起こるのである。また、あることによって悲しんだとする。何時間か、何日か過ぎてそのことを思い出して、また、同じ悲しみが生ずることがある。人はよく悲しみをあらたにしたというけれど、まえの悲しみと、あとの悲しみとりっぱな連続があって、その中間はどこにもないのである。

同じような現象がわれわれ日常の眠りの場合にある。眠っているあいだは心はどこにもない。しかるに、目をさますやいなや心は活動する。眠った場合には心がなくて起きている場合には心がある。あるのがほんとうか、ないのがほんとうか、あるといえばないし、ないといえば現われてくる。このように、有無を決定できないとする考え方を、これを空観とも妙ともいうのである。このように、この小宇宙であるわれわれの肉体から、心とか心の働きとかいうものを思索し、そのうえに仏法の哲学の教えをうけて、真実の生命の連続の有無を結論するのである。

まえにも述べたように宇宙は即生命であるゆえに、われわれが死んだとする、死んだ生命は

ちょうど悲しみと悲しみとのあいだに、なにもなかったように、喜びと喜びのあいだに喜びがどこにもなかったように、眠っているあいだ、その心がどこにもないように、死後の生命は宇宙の大生命に溶け込んで、どこを捜してもないのである。霊魂というものがあってフワフワ飛んでいるものではない。また、大自然のなかに溶け込んだとしても、けっして安息しているとはかぎらないのである。あたかも、眠りが安息であるといいきれないのと同じである。眠っているあいだ安息している人もあれば、苦しい夢にうなされている人もあれば、浅い眠りに悩んでいる人もあるのと同じである。

この死後の大生命に溶け込んだ姿は、経文に目をさらし、仏法の極意を胸に蔵するならば、しぜんに会得するであろう。

この死後の生命が、なにかの縁にふれて、われわれの目にうつる生命活動となって現われてくる。ちょうど、目をさましたときに、きのうの心の活動状態を、きょうもまた、そのあとを追って活動するように、新しい生命は過去の生命の業因をそのままうけて、この世の果報として生きつづけなければならない。

かくのごとく寝ては起き、起きては寝るがごとく、生まれては死に、死んでは生まれ、永遠の生命を保持している。

その生と生のあいだの時間は、人おのおの異なっているのであるから、この世で夫婦親子というのも永遠の夫婦親子ではありえない。ただ清浄なる真実の南無妙法蓮華経を信奉する、すなわち、日蓮大聖人の弘安二年十月十二日の大御本尊を信ずるもののみが、永遠の親子であり同志であって、大功徳を享受しているのである。

〔注〕「2　戸田前会長の生命論」は大白蓮華第一号に掲載されたものです。

三、大利益論

永遠の幸福

もし、大聖人のご遺文より成仏のご文証を引いたならば数かぎりない。いま、反対に、成仏しないということをお悲しみになってお書きになったご文証を引いてみよう。

成仏用心抄（御書一〇五六ページ）にいわく、

「法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし」

このように、妙法蓮華経の信仰は、成仏するか、しないかが根本の問題である。成仏するということが仏法修行の根底であり、成仏するほどの幸福はないと大聖人はおおせになっておら

れるのである。されば開目抄下（御書二三七ページ）に、

「日蓮が流罪は今生の小苦なれば・なげかしからず、後生には大楽を・うくべければ大に悦ばし」というおおせは深く味わうべきである。

しからば成仏とはいかなることか。とうてい、われわれごとき凡愚にはこのご境涯は説くことあたわずとはいえども、各自の信心の智解の千万分が一ともならんかと思って説いてみる。

成仏とは永遠の幸福を獲得するということである。われわれの生命というものは、この世かぎりのものでは絶対ない。永遠に生きるものである。永遠に生きるのに生まれてくるたびに、草や木や犬やネコや、または、人となっては貧乏・病気・孤独・バカ等の生活を繰り返すことは、考えてみてもとうてい忍びえないことである。

成仏の境涯をいえば、いつもいつも生まれてきて力強い生命力にあふれ、生まれてきた使命のうえに、思うがままに活動して、その所期の目的を達し、だれにもこわすことのできない福運をもってくる。このような生活が、何十回、何百回、何千回、何億万回と楽しく繰り返されるとしたら、さらに幸福なことではないか。この幸福生活を願わないで、小さな幸福にガツガツしているのは、かわいそうというよりほかにない。この成仏のことについて、深く思索してみるために、次のご文証を引いてみよう。

三世諸仏総勘文教相廃立（御書五七四ページ）（注13）にいわく、

「三世の諸仏の御本意に相い叶い二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙むり滯り無く上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滯り有る可からず。

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり乃至然るに宿縁に催されて生を仏法流布の国土に受けたり善知識の縁に値いなば因果を分別して成仏す可き身を以て善知識に値うと雖も猶草木にも劣って身中の三因仏性を顕さずして黙止せる謂れ有る可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覚まし本覚の寤に還って生死の繩を切る可し今より已後は夢中の法門を心に懸く可からざるなり、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し障り無く開悟す可し自行と化他との二教の差別は鏡に懸けて陰り無し、三世の諸仏の勘文是くの如し秘す可し秘す可し」

注13　三世諸仏総勘文教相廃立

この御書の解釈は次に詳しく述べられている。二聖は薬王菩薩と勇勢菩薩。二天は毘沙門天と持国天。

「三世の諸仏の御本意に相い叶い」とは、大御本尊を信じ、題目を唱えることである。「二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙むり」とは、大御本尊のご利益をこうむることである。「上上品の寂光の往生を遂げ」とは、成仏のことである。「須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて」とは、すなわち、また、生命がふたたび還って、人として、あるいは目的をもっている生命として、活動を起こす状態である。このように、成仏といっても特殊のところに生きながらえているのではなく、たえず九界の世界に遊戯していることをおおせである。「内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して」とは、ふたたび大御本尊にお目にかかることをいうのである。「自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」とは、慈悲の境涯より大御本尊の一分の御目的をちょうだいし、生まれてきたところのその生命の目的に対して、じゅうぶんなる価値活動をなして、みずからも楽しみ、他も利益して、自在無礙の生活を感ずることである。かくのごとき幸福こそ、真実の幸福といわねばならない。この成仏の境涯を得んと願うことを、さらに重ねて吾人は願うものである。

さて、以上の功徳について重ねていわねばならぬことは、初信の功徳と一生涯をつうじて現われる功徳についてである。

初めて信仰した者には、かならず功徳がある。これは初信の功徳ともいうべき功徳である。この初信の功徳の絶対なることを信じなければならない。なぜならば、大聖人滅後七百年の今日においては、本尊の雑乱はなはだしきものがある。日蓮正宗の本尊を除いては、ことごとく天魔外道の本尊である。姿は仏に似せようと、神を表わそうと、みな内証においては天魔外道である。しかるに、日蓮正宗の御本尊は、大聖人のご生命ご自身であり、三世十方の諸仏の本尊であり眼目である。

ゆえに、この大御本尊を信じたてまつれば、三世十方の仏菩薩は、この信者を善哉善哉とほめたてまつり、天魔外道は恐れをなすのである。信力・行力が強ければ、これに応じて法力・仏力が強く現われて、ここに利益を感ずるのである。これ本尊の大威力示現の相であって、疑うことのできない事実である。

御本尊の法力・仏力をお示しになって最初のご利益を得たのちは、各自のもつ過去の罪報によって、消さねばならぬものを消し、うけねばならぬものをうけて、罪報を消すのである。普通にはこれを罰というのである。これとて信力・行力の強い者は護法の功徳力によって軽くうけつつ、真の成仏への道をたどるのである。このことは、佐渡御書および開目抄につぶさにお示しであれば、よくよく拝読すべきである。

さて、かくして信力・行力の強い者は、かならず成仏する。その成仏の証拠として、現世においてあらゆる幸福をうるのであって、その幸福を知って、未来の成仏を確信しなければならないのである。いいかえれば初信の功徳は大御本尊に威力のある証拠であり、御本尊を信じた者が、一生のあいだにかならず幸福になるということが成仏するという証拠となるのである。

このように、ご利益を論ずれば、だんだんと高く深くなってくるが、吾人をもっていわしむれば、大御本尊を信奉したてまつる功徳というのは、これだけのものではない。日寛上人の御本尊の功徳無量無辺というおことばが思い出される。無量無辺であるから、私ごとき者の説きつくせるものでは絶対にない。私にこれ以上の会通を加えることは大御本尊に対して申しわけないことであるが、ただありがたさのためにこれを述べる。

成仏とは、仏になる、仏になろうとすることではない。大聖人の凡夫即極、諸法実相とのおことばをすなおに信じたてまつって、この身このままが、永遠の昔より永劫の未来に向かって仏であると覚悟することである。

もったいなや、かかる不浄の身が、御本尊を受持したてまつることによって、仏なりと悟るとは、なんというありがたいことではないか。この果報こそ、なにものにもかえがたい果報であって、ひとえに大御本尊の大功徳である。なにをもって御供養したてまつらん。生きては折

伏を行じ、死しては、たとい地獄の衆生になっても、御本尊を胸にだきしめ、畜生道に行っては大聖人のお衣のはじをくわえ、生々世々、ただ御本尊から離れまいと、朝夕お願いしたてまつるばかりである。

願わくは、諸氏は、私にまさる大利益を得られんことを。

〔注〕「永遠の幸福」は大白蓮華第二十号に掲載されたものです。

生きることが楽しい

このように、自分の生命というものは永遠であります。

ただ、おじいさんになってから、赤ん坊になれませんから、いっぺん死ぬのです。そして、赤ん坊になって生まれてくるのであります。生まれ変わるのではないのであります。ちょうどわれわれが赤ん坊のときから、この年までずっと続いてきているのと同じなのであります。途中で、切れたことはないでしょう。しかし、切れたみたいなときがあります。グッスリ眠っているときは、自分では生命があったのか、なかったのかわからないでしょう。しかし、夜の生命から朝の生命に生まれ変わったとはいわないでしょう。それと同じで、来世に生命が生まれ変わるのではなくて、この生命の続きなのであります。たとえてみれば、朝起きて、元気ハツ

ラツとして、晩になると疲れてグッスリ眠って、元気をとり戻すように、ずーっと年寄りになって死んで、その生命の続きが、今度は赤ん坊になって生まれてきて、またおじいさんになって死んで、また生まれてくるのであります。

われわれの生命がこの世だけでないから、宗教をヤカマシクいうのであります。来世に生まれてくるとき、また四畳半へ生まれてきて、汚い着物を着て、年頃になっても満足な福運もなく、一生貧乏で暮らしたり、病気で暮らしたりするのは嫌であります。生まれ落ちると、女中さんが三十人もついて、婆やが五人もいて、年頃になれば、優秀なる大学の卒業生として、お嫁さんは向こうから飛びついてきて、良い子供を生んで立派な暮らしをして、死んでいかなければなりません。その来世の幸福を願うがゆえに、いま信仰するのであります。今生もよくなければ来世がいいという証拠にはなりません。今生において幸せになるがゆえに、来世のことも仏の仰せどおり、確信できるのであります。安心して信心を続ければ、今生において必ず証拠が出るのであります。

信心して一年か二年して「まだダメですか」そんなにあわてることはありません。六十で死ぬなら、五十五くらいからでもたくさんであります。五年間、毎日毎日、楽しく暮らしたらよいではありませんか。それを三十代から「二年間やったけれどまだダメだ」。そうあわてなく

てもいいのであります。貧乏の味も知っていなければ、楽しみの味もわからない。我慢して貧乏しろという意味ではなくて、必ず証拠が出るのであります。信心を怠らず熱心にずーっとやって下さい。いくらやってもダメだということは、絶対にありません。断じて、そういうことにならないことを確信しているのであります。

十年、二十年とやった人は、今まで、みんな幸福になっております。御本尊の功徳は、脳ミソの中まで変わり、頭まで良くなるのであります。

このように、人間は死ななくても困ります。また死ぬ時が分かっているのも困ります。三日しか生命がないとしたら、講義の本なんか読んでいられません。ですから、人間は必ず死ななければならないものであって、死ぬ年月が分からないようにできているところに、世の中の面白さがあるのであります。これが妙なのであります。なればこそ、御本尊を拝むようにもなるのであります。

実に生命というものは面白いものであります。

死ぬときを分らせないでいて、本人には生きたがらせておいて、死なせるようにできているのであります。ですから、大聖人が本有の生死である、本有の退出であると仰せられているの

であります。

そう思いますと、御本尊を拝まずにはいられなくなります。大聖人の仰せどおり、御本尊の功徳によって権・迹・本の仏の因行果徳を承継して、死ぬ前には、ほんとうに幸せで、楽になって死なねばなりません。信心さえ強盛であれば、御本尊を信じきるならば、必ず死ぬ前、数年間、ほんとうに丈夫で、お金があって、家が平和で、思いどおりになって、……そのようになるとおっしゃっているのであります。そうでなければ、死後の成仏の証明がつかないのであります。

死ぬまで貧乏したり病気したりしてはたまりません。病気の者なら必ずなおり、心も平和で落ち着いて、行きたい所にも行ける。そうなると、苦労している間の方が、見込みがあるということになる。まだ生きるということがハッキリしてるから。そう思うと、今は本有の貧乏でも、安心です。

〔注〕「生きることが楽しい」は戸田前会長の「方便品寿量品講義」から抜粋しました。

一念三千の法門

日常生活や、あらゆる働きの根本となるものが、われわれの生命であるが、仏教では、この生命の実相――本質を一念三千で説き明かしている。一念三千とは、一瞬の生命に十界を具し、十界は互具して百界となり、百界に十如是を具して千如是、千如是に三種の世間を具して三千世間となる。一瞬の生命にこの三千が具していると説くのが一念三千である。すなわち、生命は、ちょうどガラスに入れた透明な水のようなもので、これにいろいろな色の光線をあてると種々に変色するように、縁によって種々の働きを起こす。これが一念三千である。

一、十　界　論

十界というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏である。

(1)地獄とは、よく、死ぬと地獄へ行っていろいろの鬼に責められて苦しむ等と、物語りや絵画等によって迷信化されているが、実際には、われわれが日常生活において子供に死なれる、借金に悩む等の煩悶、懊悩するその苦しみを、心に感じ、肉体および生活に現ずることをいうのである。

(2)餓鬼とは、欲に支配された貪りの状態、時間に追われたり、物質の不足を常に感じて満足を知らない生命になることである。

(3)畜生とは、目先のことにとらわれて、根本を忘れる愚かな状態、また、強い者を恐れ、弱い者をあなどる、犬、ネコ同様の生命に支配されることである。

(4)修羅とは、心が曲がっているため、すなおに物事を考えることができず、正しいことをいわれても、すぐカッとなり、腹立ちの状態に満ちみちているときをいう。この四つは四悪趣といって、これに支配されている生活には、絶対に幸せはない。次に、

(5)人界といって、親、兄弟、友人等を人なみに思いやる（なつかしがったり、心配したりする）平らかな生命の状態がある。

(6)天界とは、ほしいと思っていた物が手にはいったときとか、自分の思いどおりにことがはこんだとか等、なにか願いがかなったときに、有頂天に喜ぶ状態であるが、これは永続しない。

ここまでを六道といって、われわれの一日の生活は、この六種類の状態を縁にふれて瞬間瞬間、繰り返し、生命に感じているのである。このほかに、われわれが学問や修養、努力等によって得られる状態がある。

(7)声聞といって、ある理論をつかみ、理解ができてくるときに喜びを感じ、その思想をもって人生観とする状態であって、われわれが本を読んだりするとき、多く心を支配するもので、インテリ階級がそれである。

(8)縁覚というのは、畑を耕したり、花をいけたり、大工仕事、針仕事をしたり、体を働かせることによって、そこになんともいえない苦しみを忘れた、三昧境ともいうべき状態を心に感ずるものである。よくいう名人じょうずの心境等はこれにあたるのである。

声聞と縁覚を二乗ともいう。声聞は空理をつきつめて、煩悩を断ち切ろうと努め修行する。縁覚は一分の理を縁によって悟った者をいう。

(9)菩薩とは、絵像や仏像として普通は考えるが、われわれが自分の徳性を発揮して、社会のために尽くす働きを、心や肉体にあらわしたときをいうのである。勇気をもって他人に尽くすときは勇勢菩薩、知恵をもって行なうときは文殊菩薩であり、自分を犠牲にしても人を救うとの慈悲の心は弥勒菩薩の働きである。

いま述べたごとく、どんな努力家も勉強家も、あるいは、高位高官の人であっても、常にこの九つを繰り返しているのであるが、仏はこの九つの生命のほかに、もう一つの状態のあることを説かれている。これを仏という。

(10)仏とは、われわれの生命のことであり、決して死人や、先祖や、偶像的なものではない。われわれの生命は永遠であって、滅びることがないというのが仏の悟りであり、生命の実相である。われわれが信心し、折伏をするのは、この永遠の生命観を証得し、揺るがぬ幸福生活を実現することが目的であり、この状態を仏というのである。

この仏の生命は、ちょうど「怒り」という生命が、いますぐここに出すことはできないが縁にふれて現われると同様に、誰もがもともと持っているのである。

このように、地獄界から仏界までの十種の状態がそれぞれ縁によって生じ、心身を支配しているのが、われわれの生命の実体であり、宇宙の実相で、一切の現象のなかにこの十種は厳然と存在するのである。ところが、この十種は、必ず重なって現ずるものではなく、「地獄」を感ずる瞬間は、「縁覚」や、そのほかの境涯はなく、「怒り」の状態に立つ瞬間は、一切のものが「怒り」に満ちみちて、人界、天界等の姿は見られない。このように、二つが同時に現われることは絶対にないのである。ここにおいて、われわれがこの強く、清らかな仏の境涯に立

つためには、どの境涯も必ず縁によって生ずると同じく、仏の生命を顕現すべき対境がなくてはならない。しかし、これはどんな教義をもつ教団、宗教家にあっても、ぜんぜん知ることができない。まして、いわゆる淫祠邪教には絶対あるわけがないのである。

ここに末法の御本仏日蓮大聖人のご出現の意義があり、大聖人の観心たる、南無妙法蓮華経の大御本尊こそ、醜を美に、害を利に、悪を善に変え、滅びることのない永遠の幸福生活に立たしめ、仏の生命を顕現させる唯一絶対の対境である。

二、十　如　是

十如是とは、法華経の方便品に説かれている。すなわち「所謂諸法の如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり」とあるをいう。宇宙の森羅万象が、ことごとくこの十如是の当体であり、また瞬間瞬間の生命がことごとく十如をそなえていることを「諸法実相」と説いているのである。

相とは外面の姿・形であり、人間でいえば肉体をいう。性とは内面の性質であり、精神・心・知恵等をいう。体とは物質と精神というように分けないで「一人の人間がいる」とか「一匹の犬がいる」というように、一個の生命それ自体をいうのである。力とは内在している力、

作とは、その力が働き出すことをいう。その働きは、また、その生命自体のなんらかの因によって起こるものであり、因は外界の助縁と和合して果報を結ぶ。初めの相を本とし、終わりの報を末となして、本末は究竟して等しい。すなわち、九如是に分けられるとしても、それは一個の生命の一瞬の因果であるということである。

この十如是を日蓮大聖人のご生命——大御本尊のうえから拝して釈した戸田前会長の講義を次に掲げる。

方便品寿量品講義（六九ページ）

如是相　われわれ衆生も同じですが、みな相をもっております。人相というものをもっております。仏にもお姿がある。迹門の仏と、本門の仏と、文底深秘の仏とは、みな相が違います。ピカピカしたアミダみたいな仏相、あんなのは、考えてみたってウソだということがわかるでしょう。そんなウソのものを信じて、頼りにしてもしようがないのです。ところが、末法の御本尊、文底深秘の御本尊の如是相というのは、凡夫のお姿そのままの凡夫相でいらせられる。それが本当の仏のお姿です。

如是性　仏の性分をもっていらっしゃる。日蓮大聖人は、お姿は凡夫のお姿であるが、お心は御本仏の性分である。

如是体　そして、大聖人というご本体をつくられている。これは、御本尊についても同じくいえます。

如是力　力をもっておられる。同じ仏でも、迹門の仏と、本門の仏と、文底深秘の仏とは力が違います。文底深秘、南無妙法蓮華経という力は、大聖人というお力は、あらゆる仏をつくられているのです。

如是作　力のあるところ、必ず作用があります。働きというものです。

如是因　作用があるのには、原因があります。大聖人が末法にお生まれになって、文底深秘の大法を説かれる因は、久遠元初に、すでにできているのです。

如是縁　その縁は、末法の衆生というものを縁になさっていらっしゃる。われわれが縁になっているのです。われわれは、釈迦になんにも縁がないのです。だから、釈迦の仏法なんかでは、絶対に成仏できない、幸福になれない。そういうしまつの悪い者が生まれてきたときだから、それを縁としてご出現になったのです。

如是果　よって、竜の口のご難をうけられ仏の境涯をあらわされた。

如是報　報いをうけられた。御本仏としての、非常に平らかな境涯を九か年、身延の山でおすごしあそばして、仏の境涯を楽しまれたのが報です。

如是本末究竟等　これを仏の姿に読みますれば、如是相という大聖人のお姿、如是性という本仏のお心にしても、如是体という本体にしても、また、力にしても作用にしても、因縁果報ことごとくご本仏の姿、それ自体でしょう。本も末も、究竟して等しいでしょう。それをいうのです。ここに、かりに泥棒がいるとする。その泥棒は、如是相から、如是報までことごとく泥棒です。それが本末究竟等、一貫しているわけです。

御本尊と申し上げますれば、如是相も、如是性も、如是体も力・作・因・縁・果・報ことごとく御本尊なのです。一貫していなければダメなのです。如是相が仏で、如是性が泥棒で、如是体がネコだなんて、そんなふうに変わってはいけません。

次にこの十如是を三遍読むのは、わが身はすなわち空・仮・中の三諦、法・報・応の三身、法身・般若・解脱の三徳とあらわれることを意味する。三如是・三諦・三身の関係は、

三如是	三　諦	三　身
如是相	仮　諦	応　身
如是性	空　諦	報　身
如是体	中　諦	法　身

となる。

また、初めに「如是相・如是性……」と読むは「是の如き相・是の如き性……」と仮諦の義となり、

次に「是相如・是性如……」と読むは「是の相は如なり・是の性は如なり……」と空諦の義となり、

次に「相如是・性如是……」と読めば「相是の如し・性是の如し……」となって中諦の義となる。

三、三世間

三世間とは五陰世間と衆生世間と国土世間である。

五陰とは色・受・想・行・識の五つであり、陰とは〝おおいかくす〟の意と〝集まる〟の二つの意味がある。〝おおいかくす〟の意味で九界に約せば善法をおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。〝集まる〟の意味で九界に約せば生死の集まりであり、仏界に約せば常楽が集まっていることになる。

五陰の仮に和合するを衆生という。十界にはそれぞれの衆生がおり、仏界は、尊極の衆生で

ある。

国土世間とは十界の住するところである。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等、国土に差別がある。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べて、五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生の差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。

四、事行の一念三千

天台大師は摩訶止観に、

「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す」（御書二三八ページ）等と説いた。

すなわち、われわれの一瞬の生命に三千世間をそなえている。介爾ばかりのほんのわずかな心にも、三千世間を必ずそなえているというのである。

しかし、天台のいう一念三千は理である。観心といい、観念観法といって、心の中で、あれこれと考える世界である。

日蓮大聖人は末法一切衆生のために、この一念三千のご当体としての南無妙法蓮華経の大御本尊をご建立あそばされた。われわれ一切衆生は大御本尊を信じて題目を唱え、修行を励むならば即身成仏する、これを事行の一念三千という。

理論的には一切万物ことごとく一念三千の当体であるが、実際生活のうえから、事実のうえからみればそうではない。邪宗の信者は一念三千の当体ではなくて、ただ一念三千の大御本尊を信ずる者のみが一念三千の当体である。

「介爾も心有れば……」とは、介爾ばかりの信心があれば即身成仏するのであると、日寛上人は釈せられている。

人生の目的と幸福論

一、人生の目的は何か

「人生の目的は何か」ということは、はっきりとしていなくてはならない問題であり、また、はっきりしているようでありながら、反問されてみると、あんがい答えられないのが、世の中では普通となっているようである。

当然すぎるほど当然の問題であるにもかかわらず、自分自身で究極の目的がわからないか、または中小目的である一つの手段・方法を最終目的と思い込んでいる人が多いのである。世間で、俗にいわれ、また考えているのは、戦前であったならば、大臣になるとか大将になることを目的と思った者が多いが、いまでは実業家、芸術家、教育家、技術家、宗教家等々を志